

Title	「ファシズム」という語を日本のウルトラナショナリズムに適用しないことについての簡素な説明
Author	ラヴェル, ピエール
Citation	人文研究. 48 卷 6 号, p.71-77.
Issue Date	1996
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

人文研究 大阪市立大学文学部紀要
第48巻 第6分冊 1996年71頁～77頁

「ファシズム」という語を 日本のウルトラナショナリズムに 適用しないことについての簡潔な説明

ピエール・ラヴェル

日本史を研究している外国人にとっては、この分野で新しいものを示すのは西洋では容易であるが日本では難しいことである。日本人にとって外国人の研究に何か意味があるとすれば、それは、既に知っている物事に関して外部から異なった視線を示すことであろう。言い換えれば、外国人が事実に関する知識で新しいものを示すのが困難であっても、おそらく方法論的観点から新しいものを示すのは可能であろうということである。

フランスの学者にとって、「ファシズム」という語を日本のウルトラナショナリズムに適用するのは問題がある。ファシズムという概念の使用に関してはフランスの学者の間でも他の国々におけるのと同様の論争が存在しているが、多数の合意によって、日本やアングロサクソンの学者によるよりもずっと限定された外延がこの語には与えられている。多くのフランスの学者にとっては、ファシズムの理念型は次のような要素を内包している：民主主義国において極右翼に位置づけられる運動；宗教的ではなく政治的な性質；強権的；ナショナリスト；「下から」生じる；新しいエリートを自称し、政権獲得後は独裁政党として現実に支配する新しいエリートになる；非常に強い個人崇拜の対象となるカリスマ的指導者が存在する。

言うまでもなく、現実の組織と政治体制がこの理念型に一致する程度は様々である。ファシズムの概念の構成要素の一部しか含まないものに対しては、「ファッショ的」という語を適用することができる。

用語はいくらか異なってはいるが、多くの学者は保守勢力を三つに区別している：伝統主義（traditionalisme），強権保守（droite autoritaire），通常の保守（droite classique），である。⁽¹⁾

通常の保守は民主主義と資本主義を支持しており、現代の民主主義国的主要な政治勢力となっている。例えば今日これには、保守、自由、キリスト教民主と名乗る西ヨーロッパの政党、アメリカの二大政党、自民党と新進党、フランスの二大保守政党などが含まれる。

伝統主義は1789年の革命の価値観を拒否して旧体制の価値観を支持し、「自由、平等、友愛」のスローガンに対して、強権、階層制、家族国家觀を対立させている。しかしこれは、例えば封建的諸権利のような旧制度の全体を復興しようとしているということではなく、君主制を指示し、人民主権に対立しているのである。この伝統主義は、政治の基礎を宗教に置く J. ド・メーストルと L. ド・ボナルに代表される神権的伝統主義と、政治の基礎を過去の遺産の英知に置く E. バークに代表される史的伝統主義に区別される。

学者は一般に強権保守を、通常のナショナリズム、ファシズム、ボナパルティズムに分けている。これらの派は共通してナショナリズムを持ち、民主主義に反対し、さらにその革新派では資本主義にも反対している。しかしながら、これらの傾向の強度は非常に様々である。というのは、ファシズムは民主主義を全く拒否するのに、通常のナショナリズムとボナパルティズムの最も穩健な派は、極端な場合には自由主義に属するからである。「ボナパルティズム」は広い意味に用いられ、ナポレオン1世とナポレオン3世のような独裁者を含む一方で、強権的傾向を持ちながらも民主主義を倒さなかった C. ド・ゴールも含んでいる。ボナパルティズムがファシズムと似ているのは、ともにカリスマ的指導者、危機的状況から国を救うことを務めとする救世主を中心とした運動であるという点である。ボナパルティズムがファシズムと異なっているのは、前者が1789年の革命の価値観を支持しているのに対し、後者はそれを拒否しているという点である。ファシズムと通常のナショナリズムの間の対立は、B. ムッソリーニ対ビットリオ・エマヌエレ3世王、A. ヒトラー対 P. ヒンデンブルク元帥、J. A. プリモ・デ・リベラ対 F. フランコ将軍、F. サーラシ対 N. ホールティ・ミクローシュ提督、C. コドレアヌ対カロル2世王や I. アントネスク将軍、J. ドリオ対 P. ペタン元帥の対立であった。通常のナショナリズムとファシズムの違いは、前者がブルジョア、貴族、軍人、聖職者の既成のエリートに対する信頼を保っているのに対し、後者は様々な程度にそのようなエリートを警戒していることである。ファシズムはこのように、権力奪取の後には独裁政党として、古いエリートに加えて新しい支配的エリートになるという、革命的で人民的な側面を持ってい

る。このようなわけで、「下から」の大衆運動を起こす意志とカリスマ的指導者の存在は、ファシズムを語るには欠かせないのである。これに対し、通常のナショナリズムにはこれらが欠けていることがあり、全く「上から」の運動であったり、幕僚将校や王を指導者にしていることがしばしばある。このようなわけで、「軍部ファシズム」という表現は日本では一般的ではあるが、フランスではそうではないのである。

言うまでもなく中間的な場合も数多い。例えば、ペタンは本質的には通常のナショナリズムに属していたが、伝統主義からも影響を受けており、救世主としてボナパルティズムにも属していた。ド・ゴールは通常の保守に近かったので、彼の後継者であるジャック・シラクの党はボナパルティズムのあらゆる要素を捨て去り、完全に通常の保守に属している。ファシズムが国によって異なっていたことは言うまでもない。例えば、イタリアのファシズムは国家主義であったし、ナチズムは民族主義であった。

このように定義された「ファシズム」が、一方では1919年以降に日本で広がったウルトラナショナリズムの運動に、他方では1932年から1945年まで日本を支配したウルトラナショナリズムの体制に、どの程度まで適用されるのであろうか？

体制に関するについては、簡単に否定で答えることができる。

ナショナリストの運動と体制は、それら通常のものであれファシストのものであれ、キリスト教会とは別のものであり、たとえその主張がキリスト教を支持していたとしても、宗教的ではなく政治的な性質を持っていた。反対に、祭政一致の原則によって、天皇制国家では政治は宗教に基づいていた。というのは、天皇は、同時に国家の指導者であり、神道の最高祭司であり、現人神であったからである。神主は公務に仕えるものであり、国家の儀式は神社で執り行われた。「国体の本義」のような公式の教義書は神話に重要な地位を与えていた。ナショナリストの運動と体制に対するキリスト教会の関係は往々にして悪く、特にファシズムに対してはなおさらであった。そしてたとえ関係が良好であっても、その関係は互いに独立した相手としてのものであった。反対に国家神道は天皇から独立したものではなかった。

ファシストと通常のナショナリストの党や指導者の正当性は新しいタイプのものであった。というのは、この正当性の基礎は、これらの党や指導者が民主主義と金権政治という近代病に対する反動として国民の間から自然発生的に生み出されたものであり、国民のエネルギーを集中させて歴史の最上の

ものを代表している新しいエリートであるという考えだったからである。反対に、天皇制国家は近代的な組織であったとはいえ、非常に古くから続く伝統的な天皇の正当性を基礎としていた。この正当性の継続は、例えば大政奉還、王政復古、版籍奉還、明治維新といった表現に表れている。

日本では下からのナショナリズムは権力の座につくことができなかつたので、ウルトラナショナリストの体制が成立しても新しいエリートは出現しなかつた。大政翼賛会は独裁政党ではなく、官僚に支配された団体であった。同様に、軍部が強力な権力を持っていたため、この体制はファシストの体制よりも通常のナショナリストの独裁体制に類似している。さらに、この体制がヨーロッパの二つのタイプのナショナリストの独裁体制と異なっているのは、近衛文麿の宮中グループによる、身分が高く古い貴族が重要な位置を占めていたからである。反対に、ヒトラーとドイツ貴族、ムッソリーニと宫廷は互いに仲が良くなかったし、コドレアースはカロルの国王独裁体制により暗殺された。それゆえ、エリートの観点から見ても、継続性はヨーロッパにおけるよりもずっと強いものであった。

大衆統制の分野でも、天皇制国家は、ウルトラナショナリストだった時代も含めて、単に特高警察のような近代制度を用いただけではなく、町内会や青年団のような伝統的制度をも再利用した。ファシスト体制の大衆指導の制度が全く新しいものであったのに対し、天皇制国家はこのように前近代社会との強い継続性を持っていた。

ウルトラナショナリストの体制はファシストともファッショニスティックとも呼ぶことはできない。「天皇制ファシズム」という表現をフランス語に翻訳することはできるが、それを用いるフランス学者はあまりいないであろう。では、「天皇制ファシズム」を一般的な用語体系の仲にどのように位置づけることができるだろうか？祭政一致と現人神の教義に従えば、これははっきりと神権的伝統主義に位置づけられる。しかしながら「古事記」と「日本書紀」以来、この伝統主義は本質的に、万世一系の教義のために歴史主義であった。さらに、この伝統主義は本質的に、神国の教義のためにナショナリストでもあった。最後に、ウルトラナショナリストの体制は、企画院の革新官僚と新体制運動の革新派を通じて、イタリアのファシズムとナチズムから直接の影響を受けていた。内政においてはこれらの影響が統制経済の施行と政党の廃止を促進したとはいえ、このどちらの政策もファシズムの特徴ではなかった。これらの影響は外交においてより強力であった。というのは、日本はドイツ

とイタリアと同盟を結び、民主主義国の世界的優位を打破しようとしたからである。しかしこれもまたファシズムの特徴ではない。ソビエト連邦も長期的に同じ目標を持っていたからである。言い換えれば、日本のウルトラナショナリズムがファシズムと共に持っている特徴は、全ての全体主義が持っている特徴であり、ファシズムだけの特徴ではなかったのである。それゆえ、日本のウルトラナショナリストの体制は、本来の意味でのナショナリズムとは異なる伝統主義であると定義することができる。しかしこの体制は、ヨーロッパの伝統主義と二つの点で異なっている。第一に、この体制は史的伝統主義とナショナリズムを本質的に含む神権伝統主義だったことである。ヨーロッパではこれら三派ははっきり区別されていた。第二に、この伝統主義は1917年から1945年にかけて世界に広がった共産主義やファシズムと同じ黙示録的な波の中にあったことである。この時代のヨーロッパでは、19世紀を通じて凋落し続けた伝統主義はもはや重要な政治勢力ではなかった。これらの違いの第一のものは、日本の内在性と西洋の二元論の対立の一例である。第二のものは、日本では西洋よりも近代化が遅れたことが原因となっている。

下からのナショナリズムに関するものについては、そのいかなる組織も留保を付けずにファシストと呼ぶことはできない。根本的な違いはカリスマ的指導者と個人崇拜が欠けていることである。なるほど歴史家たちはしばしば北一輝の「カリスマ性」について語るけれども、それによって彼らが意味しているのは、全ての強い個性が持つ心理的なタイプの威光と影響力であって、国民のエネルギーと精神と歴史の最上のものを体現する救世主の理論ではないのである。1945年以前の日本では、カリスマ的指導者の地位は天皇が先に占めていた。それは、当時の日本が非常に伝統的であったため、聖なるものが俗化された非宗教的な形式が発展することができなかつたからである。厳密な意味での政治的カリスマ性は、宗教的カリスマ性を基礎としなくては存在できなかつたのである。これら二つのカリスマ性を備えていると主張し、天皇とのある種の同等性を示唆した唯一の人物は、宗教的指導者の出口王仁三郎であった。彼はそのため不敬罪で有罪宣告を受け、大本教は禁止されて厳しく罰せられた。ほんのわずかでも個人的なカリスマ性を主張することに対する禁忌は、例えば東条英機首相が、ヒトラーやムッソリーニ、さらにはF. D. ルーズベルトに等しい個人権力を持っていることを否定し、天皇の臣民に過ぎないと主張する必要があったということによって示された。下からのナショナリズムの大多数のグループに欠けていたもう一つのファシズムの

要素は、大衆運動を起こす意志である。というのは、大多数は、少数の活動家や軍人によるクーデターを期待していたからである。さらに、「下から」の活動家によるクーデターの企ては「上から」のエリートに属する幕僚将校を権力の座につけることを目的としていたが、幕僚将校は権力を握ろうとはしなかった。そして全てが天皇中心主義を支持していた。これが北一輝をファシストと呼ぶことができない第二の理由である。大川周明は神武会を設立した時にはファシズムに近かった。というのは、この組織は大衆運動であろうとしていたからである。しかし実際には、彼は幕僚将校による権力奪取を期待し続けた。さらに、彼の根本思想では宗教と儒教が重要であったので、その思想には非常に伝統的な側面もあった。同様に、革新官僚と新体制運動の革新派を構成する急進派の大多数は、官僚と軍人の既成のエリートに結び付いていた。出口王仁三郎によって設立された昭和神聖会はファシズムと同じく大衆運動であろうと欲していたが、この会では政治と宗教が分離されていなかったので、これをファシストと呼ぶことはできない。というのは、その指導者は宗教家であり、「皇道の本義に基き祭政一致の確保」を原則としていたからである。あまり留保をつけなくともファシストと呼ぶことができる唯一のウルトラナショナリストの組織は、中野正剛の東方会であった。というものこれは、宗教的ではなく厳密に政治的な、既成のエリートから独立した独裁政党を設立することを目的とした大衆運動の試みだったからである。さらに中野はヨーロッパのファシズムをはっきりと支持していた。しかし彼もまた、用語の厳密な意味でのカリスマ的指導者であろうとはしなかった。要するに、これらのグループや人物をファシストと呼ぶことが不可能であったり困難であったりするのは、彼らの天皇中心主義に由来しているのである。このためにカリスマ的指導者の誕生が根本的に不可能になり、「下から」生じたものを正当化することが困難だったのである。下からのナショナリズムのこの天皇中心主義は、通常のものであれファッショ的なものであれ、本来の意味でのナショナリズムが伝統主義に進んで従属していたことを意味している。

ウルトラナショナリズムの体制を伝統主義の一般的カテゴリーの中に位置づけることには二つの利点があるようと思われる。第一に、これによってファシストのイタリアやナチスドイツとの違いを説明できるということであろう。第二次世界大戦は四つの陣営の対立であり、これは現代の四つの大きなイデオロギーを代表していた。すなわち、ソビエト連邦の共産主義、イギリスと

アメリカの自由主義、ドイツとイタリアのナショナリズム、そして日本の伝統主義である。第二に、これによって当時の日本の精神的かつ知的雰囲気をよりよく理解できるということであろう。例えば、転向のような現象や、日本浪漫派や京都学派の人達のような文化人の多くが体制を支持したことがよりよく理解できるのである。伝統的社會では君主制の神聖化は当然である。1932年から1945年にかけての日本を理解するには、例えば同時代のフランスと比較するだけでは不十分である。ルイ14世の時代のフランスと比較するのも理解を助けてくれるであろう。彼は現人神ではなかったけれども、今日では国有財産の一部となっている有名な知識人や作家によっては、今では卑屈とも思えるほどの賞賛を表現する対象であった。さらに、近代化は遅れば遅れるほど急激に進むのであるから、ウルトラナショナリズムを伝統主義として定義することにより、1945年に起こったその崩壊とそれに続く民主主義の定着が、何において日本の近代化の決定的段階であったかがよりよく理解できるであろう。⁽²⁾

(翻訳：久後貴行)

註

1. 「強権保守」の使用は他の用語ほど広まってはいない。伝統主義は著者によつては「保守主義 (conservatisme)」とも呼ばれているが、この用法はまれで、通常の保守の右派を示す「保守主義」という語の第二の意味の前に消えつつある。
2. 日本のウルトラナショナリズムを「ファシスト」と呼ぶことを否定しているために、その抑圧的な性質や戦時中に犯した残虐な行為を否定し過小視する願望が認められるという批判があるかもしれない。しかしこれは非常にナイーヴな批判である。というのは、人類の歴史は、ファシストでなくても抑圧的でなり残虐な行為を犯すということをはっきり示しているからである。